

長年続いてきた日本の受動的・同調的な学びを主体的・対話的で深い学びに変えるために私たちができること



現状の日本の教育はどこが問題で、どう改革すべきなのか。女性初の公立中学校民間人校長となり、さまざまな教育機関にかかわり、不登校対策にも取り組むなどし、現在は広島県教育委員会教育長として改革に取り組んでいる平川理恵氏が広島県の改革事例を語った。

講師：平川 理恵 氏

広島県教育委員会 教育長



組織風土を変えるために手書きの瓦版「平川通信」をトイレに掲示

私は主体的・対話的で深い学びの真の実現のため、現場主義を貫いて、現在の学校や教育委員会の流れにどのように新しい考え方を取り入れることができるのかを考えている。日本の教育にはチョイスがない。そのチョイスを作っていきたいと考える。

組織風土を変えるために、私が何を考えているかを開示して知ってもらうため行ったのが「平川通信」の発行だ。広島県には特別支援学校を含め800校ほどあるが、年間150校ほどの学校現場に足を運び、気が付いたことや考えていること、写真などを手書き瓦版にして、教育委員会のトイレなどに掲示している。反響は大きく、メールなども多く届いている。

組織体制をフレキシブルにするために組織変更も多く行っている。例えば、縦割りの各指導課に横串を通すため「個別最適な学び担当」や「学校教育情報化推進課」、さらに「不登校支援センター」も設置した。他にも学校関係者が民主的に話し合う場が制度的に担保されるコミュニティスクールの設置も進めている。

広島県の産業を担う人材を育成するため商業高校をアップデート

福山市立常石小学校では、異年齢が共に学び合うイェナプラン*を実施する。何年生といった学齢にこだわらない教室で、今年度4月から「常石ともに

学園」として開校した。実はこの学校は全校児童が60人に減り廃校の危機にあった。だが、開校を前にした現在の児童数は約100人に増えた。

また商業高校の改革にも取り組んでいる。広島県には四つの商業高校がある。これをアップデートするために、各校の若手教師とロサンゼルス市の貧困地区にあるビジネスハイスクールに視察に行った。日本の商業高校とどこが違うのか。先生たちに問いを投げ掛けたところ、カリキュラムが面白いという答えだった。そこで、現地で新しいカリキュラムを作った。カリキュラムの軸は「生きるって何?」。その視点でビジネス探究プログラムを実施するなどした結果、生徒たちには明らかな変化が見えた。

商業高校をアップデートするのは、広島県の産業を担う人材を育成するためだ。商業でデジタルマーケティングを担い、工業で周辺のシステムや機器を担い、農業でスマート農業を担う。そして、広島県でバリューチェーンをつなぐ。商業高校に続いて、昨年度から工業高校、農業高校のアップデートにも着手する。

公立高校の入試改革に着手。調査書の所見欄を廃止し欠席欄をなくす

教職員の研修では、授業をわくわく楽しいものに変えるために、ブルーム

分類学に基づく深い思考を促す「本質的な問い」を軸にした研修など、「統合的」な研修を実施している。3日間のプログラムで、今後全教職員に実施する予定だ。

公立高校の入試改革にも着手した。調査書(内申書)は令和5年度の入学者選抜から所見欄を廃止し、欠席欄をなくした。3年間の生徒の頑張りを教師が公私共々全部知って書くことなど不可能であり、また、今は出席したから偉いという時代でもない。その代わり新しい入試では「自己表現」を実施する。採点の比重も学力検査6、調査書2、自己表現2とする。自己表現や自己実現の前提には自己認識や自己開示がある。しかし、安心安全な環境でなければ自己開示はできない。子どもが何を言っても許される環境をつくる必要がある。それが今回の入試改革の一番の主眼である。

この入試改革に対して1,545件のパブリックコメントが寄せられた。異例の多さであり、特に当事者の児童生徒から325件もの意見が寄せられた。こうした経験こそが主権者教育ではないかと考える。

*イェナプラン教育は、ドイツで始まりオランダで広がった、一人ひとりを尊重しながら自律と共生を学ぶオープンモデルの教育

